第１回山古志復興新ビジョン研究会　円卓会議　議事概要

1.日　時　**平成１７年1月１１日（火）１５：３０～１７：３０**

2.場　所　**新潟ワシントンホテル　４Ｆ平安の間**

3.議事概要

（１）第１回全体会議の議事確認（省略）

（２）山古志村の復興ビジョン策定方針の検討

①復興新ビジョン検討における山古志の課題

- **事務局より説明**
- **山古志村青木企画課長からの説明**

（青木企画課長）

- **山古志村としては、３月までに３本の柱で復興の骨子を示したいと考えている。１つ目はインフラ整備、２つ目は住宅の問題、そして３つ目は公共施設の配置・整備である。**
- **今回の山古志の復興については、山古志だけの問題ではなく日本全国の７割を占める中山間地域の復興モデルとして考えていきたい。それは、必ず、この先、中山間地域で地震が起こる可能性があるからであり、また中山間地域の生活というものを全国の皆さんに理解していただきたいと思っているからである。中山間地域の生業の中心は農業と思われがちだが、棚田での米づくりや山菜採り、薪炭など自然の恵みをトータルに受け入れたなかで、プラス、いくらかの現金収入があるという生活である。**
- **山に帰って生活したいという人がほとんどである。言葉を言い換えると山でしか生活できない人がいるということである。その人たちが山で暮らせるようにするにはどうしたら良いか、どう復旧していけば良いかということが再生の基本スタンスでなければならない。私たちが考える再生とは、村民が山に戻って生活することであり、ただ単に長岡で住宅を再建すればよいという議論ではないと考えている。もちろん莫大なお金をかけてほしいと言っているわけではなく、中山間地域の復興を経済効率の議論だけで決めるものではないと思うからである。**
- **棚田は非効率だというが、中山間地域では最も効率がよく適しているかたちの田んぼが棚田である。効率の良い区画整理した田んぼを山につくる必要はない。また棚田を豊かな自然の代名詞のように言うが、決して自然物ではなく人工物である。何世代にも渡って、それこそ鍬一本で築き上げてきた人工物である。おそらく村民はそんなに難しく考えていないはずで、今度は鍬でなくブルドーザーやユンボを使ってやり直せばいいと思っているのではないか。ここはか**

なり重要な部分だと思っている。山で暮らしてきた人間の知恵、技術を生かして復興を図るべきだと思っている。

- 豪雪など自然条件や社会条件など、与えられた条件を受け入れる気質はあるが、そのなかで何ができるのかという積極的な面も同時に持ち合わせている。それが養鯉であり、闘牛である。奈良、京都でも昔から鯉を飼ってきたが、錦鯉をつくることはなかった。当初は、錦鯉そのものが地域限定の楽しみだったが、全世界へ流通させるまでにいたったが、それまでには何百年もかかっている。こういった文化の復興も考えていかなければならないが、それには、何としてでも鯉を守ろう、闘牛を助けようとした村民のエネルギーが相当力になるのだろうと思っている。
- 村民が棚田を管理することで、貯水機能やダム機能、山地の崩壊を防ぐなど国土保全の意味があるとは日々思っておらず、当たり前の生活をしているだけある。しかし、今度、震災後、復興して村に入るとき、同じ仕事を、同じ生活をしても、ここに住む意味や意義、その価値があるのかを十分認識した上で帰る人間が相当いると思っている。そこには、今まで培ってきた文化というものを更に発展させる計画がなければいけないと思っている。
- 住宅の問題でいえば、持ち家率がほぼ１００％であることを考えると、自分で自分の家を再建できることが中山間地域で生活を営むうえではベストだろうと思うが、住宅再建については、個人財産の形成に国は関与できないということが重要なことだと思っている。
- 日本の中山間地域の人たちが強い関心を持って注目していると思うが、日本人が持っていた稲作文化化から培われてきた精神基盤というものも、崩壊してしまう恐れがあり、全国的に見れば、極めて小さい村だが、ここに含まれている部分は凄く大きいものがあると思っている。

（江村委員長）

山古志村としては、３月上旬までに何を住民に提示しようとしているお考えなのかお聞かせいただきたい。

（青木企画課長）

帰村スケジュールまで示せるかどうかが重要だと思っているが復興計画の骨子を示したいと考えている。役場の担当が２ヶ月間、山に入って農地、道路などの被害状況を確認してきており、国土交通省でもインフラ整備に関してはある程度具体性を持ってきている。住民の意向も含めて村としての方向性を示すことができればと考えている。

（江村委員長）

世代によって考えが異なると思うが、帰村に関しての親子の意識の差は？新聞などでどうするのか個人が各々の話をされるが、そのような話は基本方針がでてからになるのか？

（青木企画課長）

各々の考えについては座談会や聞き取り調査など各家庭の経済状況まで踏み込んで綿密に調査していきたいと思っている。世代の例で言えば、公共住宅を作る場合、おじいさんやおばあさんは住むだろうが、次の世代はどうなのかという部分は重要である。ただ今回の災害によって、帰るつもりはなかったが是非帰りたいというような話が現実にあり、地域存立の可能性は高めていかなければと思っている。

（西澤座長）

闘牛を観に来るお客さんはたくさんいると思うが、お客さんたちがお金を使うような商品はあったのか？

（青木企画課長）

あまりない。イベントとして闘牛を観に来るが、宿泊するのは弥彦温泉などで山古志は通過点となる。錦鯉のお客さんにしても何ヶ月も長岡市のホテルを貸し切って山古志に通う。一番経済効果が現れるのは長岡市である。

（平井座長）

新陳代謝をどうするかということが大切である。つまり、今、被災にあった人々は山古志に帰るが、次世代はどうかという問題がある。世代交代のスケジュールを示さないといけないのではないか。住宅の問題も大切である。村内で一時的な住宅建設ということも考えられないか。

（青木企画課長）

仮設住宅を山古志に持っていくというやり方があると思う。やはり村民が山に帰って、地域再建を目の当たりにしておく必要があると思う。ただ、建築基準法の関係で仮設住宅の限度が２年間と決まっている。そこをクリアにする必要がある。

（伊藤総合アドバイザー）

地震保険に加入していた住民はいないのか。

（青木企画課長）

ＪＡの建物更生共済（たてこう）に加入している人が多い。

（伊藤総合アドバイザー）

あれだけ崩れていると、来年再来年、必ず崩れる。道路の前に砂防の手当てが大事である。

（青木企画課長）
そう考えている。あと道路整備でいうと道路工事だけでなく雪崩防止柵の整備等が必要である。

（青木企画課長）
住民への聞き取りについて、何度も同じような質問をあちこちから行うのは、住民にとっても辛いし、調査結果もぞんざいなものになってしまう。住民の本当のところを知りたいので、聞き取りはできるだけ一本化したい。

（青木企画課長）
今日も聞き取りのための座談会を予定している。ここで中座させていただくことをご容赦願いたい。

②過去の災害復興に関する事例紹介

- 事務局より、「雲仙・普賢岳噴火災害」、「北海道南西沖地震」、「三宅島噴火災害」、「921 台湾大地震」の４事例についてとりまとめたことを説明

③復興新ビジョンの大きな方向性の検討

- 事務局より、再建集落の考え方、ロードマップ、中間報告のイメージについて説明
- 了承頂く。

３.アンケート調査設計（案）の検討

・事務局より、アンケート調査について説明
・意見交換

（江村委員長）
もう少し、質問項目を減らしたほうがよいのではないか。住民は高齢者も多く、相当ナーバスになっていると思う。

（西澤座長）
やはり、もう少しスリムにしたほうが良い。1/3 くらいのボリュームにしてはどうか。

（江村委員長）
山古志村長のあいさつ文に、４月に合併する長岡市からのコメントも入れたほうが良いのではないか。

（事務局）

あいさつ文は長岡市長との連名も含めて相談する。アンケート内容は、わかりきったところは削る。1/17 日の週から始めたいので、今週中にそのほかお気づきの点があればご意見頂きたい。

４.今後のスケジュールについて

・事務局より、今後のスケジュールについて説明。

・委員から了承頂く。

５.その他（省略）

閉会

（文責：事務局山口）